



春のプレゼント行動

東日本大震災から8年

多くの方が被災した2011年3月11日の東日本大震災から8年が経過しました。死者、行方不明者、関連死を含め、2万2131人の方が犠牲となり、今も約31000人の方が仮設住宅で過ごしています。宅地を造る「高台移転」は93%、災害公営住宅は98%が完成し、最大で47万人だった避難者は5万2000人まで減っていますが、復興とはまだまだ言えない現状が続いています。

福島第一原子力発電所事故に伴い、福島県ではこれまで10市町村で避難指示が解除され、原発が立地する大熊町の一部が4月に解除される見通しとなっています。しかし、解除地域の住民登録者数に対する居住率は、2割強にとどまっているのが現状です。

首都圏においては多くの「帰宅難民」が発生し、中には自宅まで10km、20km歩いて帰る事態まで生まれ、東日本大震災の被害の大きさを物語っています。

「JR東労組としての取り組み」

これまで私たちは、爪痕が残る震災直後から、瓦礫撤去のボランティアやイベントボランティア、春のプレゼントなど、被災された方々と寄り添う取り組みを行ってきました。震災後すぐには、各地本の協力のもと物資支援も行いました。

労働組合として、苦勞されている方の立場に立つこと、そして、鉄路は住民の足であり、地域との連携を深めることは、私たち鉄道労働者にとって大きな責任であることから、全地本の仲間と共に展開しました。被災線区の復旧が決まり運転再開が実現したとき、鉄路での復旧を心待ちにしていた地域の皆さんの思いは、感慨深いものでした。



泥出し等のボランティアを行う



津波被災時に止まったままの時計



地元の方と共に運転再開を盛り上げる



防災士を中心に防災・減災意識を高める

東日本大震災はマニュアルだけではなく、経験則に基づく組合員の判断で、お客さまの命を守り抜きました。

私たちJR東労組はその教訓を活かすために、200名を超える仲間が防災士資格を取得しました。資格取得を目的とすることなく、自らの安全意識を高めると共に、災害に強い鉄路をつくり出すために、防災士が中心となり現地踏査を現在も継続して行っています。また、国際鉄道安全会議においても防災・減災の取り組みを発表し、世界各国の参加者から高い評価を得ています。

—— 東日本大震災から8年! ——

安全に対して妥協せず 命を守る取り組みを職場から積み上げることが 今を生きる私たちの使命だ!!



常磐線新地駅で被災した車両



東松島市社会福祉事業協会の冊子にJR東労組の取り組みが掲載

職場の仲間と共に命を守る運動を展開しよう

職場では「危機意識が薄れている」「安全意識が低下してしまっている」という声も聞こえてきます。その一つの要因としては、東日本大震災や、これまで多くの経験を積んだ人が転勤や退職をし、経験談を職場で語れる人が少なくなっていることです。また、ルールやマニュアルは大事ですが、なぜそのルールやマニュアルができたのか、何のためにあるのかという点に対して、こだわっていない危機感が出されています。仲間の具体的な声として「自分がミスをして悔しい思いをしてしま

った体験を、後輩に同じ思いを絶対にさせない」として前は語れていたが、今はそれができにくい雰囲気になっている」と言われています。私たちは、自らの経験談や失敗談を素直に語れる職場風土をつくり出し、共有化することを通じて防災・減災意識を今後も継続して高めていかなければなりません。また、「マニュアルを超えて判断し、命を守り抜いた」という東日本大震災の教訓を活かし「感性・感覚・判断力」を常に養える職場風土をつくり出していきましょう。そして、災害から組合員とお客さまの命を守るために、防災士の仲間を中心としながら、安全議論と実践を職場から積み上げていきましょう。



被災時の仙台駅新幹線ホーム

地域との連携を強化し さらなる安全を全組合員でつくり出そう!!